父と歩く道

山形県立天童高等学校　二年　清野　櫻七

私の身近には、足に障がいのある人がいる。それは私の父である。父は交通事故に遭い、足を悪くしてしまった。そのため、今は装具をつけて歩いている。父が交通事故に遭う前の私は、障がいのある人が普段どのようなことを感じながら生活しているのか、あまり深く考えたことがなかった。しかし、父と一緒に生活するようになってから、少しずつ自分の考え方が変わっていった。

父と出かけると、階段や坂道など、歩くことが大変そうな場所がある。私が父に肩を貸して一緒に階段を上がったり、坂道では後ろから背中を押したりする。また、父が歩きやすいように、重い荷物はできるだけ私が持つようにしている。手伝ったときに父から「助かった、ありがとう」と言われることがある。その言葉を聞くと、私も「手伝ってよかった」と思う。

こうしたことは、私にとって家族を手伝うという普通のことだった。父と一緒に出かける機会が増えるにつれて、今まで気にしていなかったことにも目が向くようになった。例えば、以前は街にある階段や段差を見ても何も思わなかったが、今では「ここは父にとって歩きにくそうだな」と考えるようになった。自分にとっては何でもない場所でも歩くことが大変な人にとっては、大きな負担になることがあるのだと気づいた。

そして私は、障がいがあるという一つの部分だけで、その人のことを決めつけてはいけないと思うようになった。父は足が不自由になり、以前より大変になったこともある。しかし、父には父の生活があり、できることもたくさんある。障がいがあるからといって、その人が何もできないわけではない。私は父との生活を通して、その人の「できないこと」だけを見るのではなく、「できること」や「その人らしさ」を見つけることが大切なのだと感じた。

また、私は「助ける」ということについても考えるようになった。障がいのある人に対して、「かわいそうだから助けてあげる」という気持ちだけでは、本当の意味で相手を理解することにはならないと思う。大切なのは、その人を一人の人として尊重し、必要なときに手を差し伸べることだと思う。そして、助ける側と助けられる側をはっきり分けるのではなく、お互いに支え合えることが大切なのではないだろうか。

父との生活を通して、私は今まで気づかなかったことに気づくようになった。そして、高校で、社会福祉について学ぶ中で知った「共生社会」という言葉が、少し身近なものに感じられるようになった。共生社会とは、障がいのある人だけが周りに合わせて頑張るのではなく、障がいの有無に関わらず、誰もが自分らしく生活できる社会のことだと思う。父と一緒に出かける中で、段差や坂道など、生活の中には困難に感じる場所があることを実感した。設備を整えて、誰もが利用しやすい環境をつくることはもちろん大切だが、それだけではなく、周りにいる人が相手の立場を考え、必要なときに支え合うことも、共生社会には必要なのだと思う。

父との生活がなければ、私は今まで街の段差や坂道をこんなに意識することはなかったと思う。父が歩く姿を見て、「ここは大変そうだな」と考えられるようになったことで、父だけではなく、他にも困っている人がいるかもしれないと考えるようになった。自分の身近な経験から、少しずつ周りを見る視点が変わったのだと思う。

これから私は、困っている人がいたら、相手の気持ちを考えながら、自分にできることを行動に移せる人になりたい。ただ一方的に助けるのではなく、「何か手伝えることはありますか」と相手の意思を大切にすることも忘れないようにしたい。そう思うようになったのは、父との生活の中で、誰かのために行動することの大切さを実感したからだ。父から言われた「助かった、ありがとう」という何気ない一言。その言葉があったからこそ、誰かのために行動することの大切さを実感できた。私は、このような小さな思いやりは、一人だけで終わる

ものではないと思う。一人が誰かを思いやり、その思いやりがまた別の人へ広がっていけば、少しずつ大きな輪になっていく。私もその輪の一人として、相手との違いを認め、お互いに支え合える社会をつくっていきたい。父との生活を通して学んだことを、これからの自分の行動につなげていきたいと思う。